



「明るい民主県政をきずく香川県連絡会」は7日、香川県の池田豊人知事あてに、2025年度予算についての要望をしました。日本共産党県議

団の榎昭二県議が同席しました。連絡会の8団体が参加し、教育、保育、雇用、中小企業支援、農業など9分野、78項目の重点要望を提出しました。

## 民主県政の会が 来年度の予算要望

民主香川

定価 月 100円  
発行所  
民主香川社  
高松市藤塚町  
3丁目13-14  
☎(087)834-7311

## 県医労連が署名活動

香川県医労連は7日、高松市のJR高松駅前で「安全・安心の医療・介護を」と人員増と処遇改善を求める署名活動をしました。約20人が参加しました。



署名は医療・介護の現場は、「崩壊待ったなし」の危機的状況にあるとして、国会に請願するもの。駅利用者らが足を止め53人分の署名が集まりました。県民医連の独

料化については、県内の自治体で実施済みですが、県の制度の創設を求めました。高校の授業で使うタブレット端末の公費負担の継続で県からは「保護者の経済的負担軽減のため、半額の端末購入補助を行う」との前向きな回答が一部ありましたが、各団

体が求めた県独自施策の創設について回答はありませんでした。会の井上存身(のぶみ)幹事は、「県知事が国の方に向けた県政運営をしているが、私たちが毎年の要望で少しずつ県政にも反映がある。今後要望を上げ続けていくことが重要だ」とのべました。

## 異台鼓太

マルティン・ニーメラ―牧師の詩に「ナチスに共産主義者、社会民主主義者、労働組合員が連れ去られるときに声を上げなければ、彼らが私を連れさったとき、私のために声をあげる者は誰一人残っていなかった」とある。

日本では公務員も民間人も、日本人、外国籍の方も問わず命や権利が奪われている。斎藤元彦前兵庫県知事のパワハラ問題で、亡くなった県民局長、県課長は名前がある人間だ。「赤木俊夫さんを、ウィシユマ・サンダマリさんを忘れない」と思いを強くしても、多くの人間が自死を選ばざるを得ないような人権後進国が日本だ。毎年いまだに自殺者が2万人以上出るのは、内戦や紛争・戦争が起きている国レベルで日本は異常だ。

国内外、政情は不安定で見通せない未来のなかでも、しかし精一杯、人権を守るために抵抗し、声をあげよう。声をあげる一人となろう。(ま)

## 保育問題連絡会が署名

今、国の予想を超えるスピードで子どもの数が減っています。この少子化を止めるために国は「異次元の少子化対策」として、「こども未来戦略」を打ち出し、私たちが長年求め続けてきた4・5歳児の職員配置基準改善がようやく実現しました。

しかし、期限を定めない経過措置の設定や1歳児の配置基準は国際的にも負しいままで。さらなる改善とための財源確保は緊急の課題です。

映画案内 『拳と祈り 袴田巖の生涯』

●11/29～

●会場 ホール・ル・レ

◎監督 笠井 千晶

◎出演 袴田 巖・秀子  
その他

すべての年齢でさらなる改善を!

保育士の賃金と労働条件の引き上げを!

保育士の賃金は全国平均より低く、労働条件も劣る。子育て世代の負担軽減のため、保育士の賃金と労働条件の引き上げを求めます。

だれもが安心して子育て支援施策を!

すべての子育て支援施策は、子育て世代の負担軽減のため、保育士の賃金と労働条件の引き上げを求めます。

小島烏水(本名・久太)は、高松市三番町(旧高松市女性セクターの一角)に生まれた。小島家は代々、高松藩家老側用人の家格であったが、明治維新で没落。一家は活路を求めて上京した。父は横浜税関に職を得ることができた。

一八八七年、烏水は横浜商法学校(現・横浜商業高校)にすすむ。法律事務所や商社に勤務した後、一八九六年、横浜正金銀行(現・三菱UFJ銀行)に入る。

登山家の烏水が広く読書界に迎えられたのは、『不二山』と『日本山水論』を出版した一九〇五(明治三十八)年のことである。

この年の春から、烏水は日本山岳会の設立のため中心となって働いた。会則は英国アルパイン・クラブに範を仰ぎ、設立趣意書は烏水が書いた。会員は四

百名ほどになり、同年十月に正式に発足をみた。ここに日本における近代登山が産声を上げたのである。一九〇七年の会員名簿には、島崎藤村、田山花袋、柳田国男、小山内薫らが名を連ねている。

一九〇八年四月、函館から海路、横浜に上陸した石川啄木は、すぐさま烏水の勤務先を訪ねてくる。烏水を文学上の先輩とおおいでの訪問であった。啄木の日記には次のようにある。「正金銀行の預金課長、紀行文に名を成して、評論に筆をとる此山岳文学者は、山又山を踏破する人と思へぬ程、華やかな姿をして居た。瘦せた中背の、色が白くて艶黒く、目の玉が機敏の動く人で、煙草は飲まぬ。名知らぬ料理



よりも、泡立つビールよりも、話の方がうまかった。」

一九〇九年八月、府立三中の五年生だった芥川龍之介は、級友らと槍ヶ岳登山に出かけている。十七歳の芥川は、烏水の「山水無盡蔵」を読んで大きな影響を受けていた。後に芥川は「槍ヶ岳紀行」を書いている。

一九一一年、文芸雑誌「文章世界」が企画した「文界十傑」投票で、紀行文の部において烏水が第一位に選ばれた(烏水7007票、大町桂月5516票、田山花袋2760票)。なお、小説では藤村、翻訳では鴎外、詩では北原白秋、短歌では与謝野晶子が第一位に選ばれている。烏水は紀行作家として確固たる地位を築き上げていたのである。

一九三一年、日本山岳会は会長制に移行し、初代会長に烏水が選ばれた。

一九八七年、『小島烏水全集』(全十四巻、別巻一)が完結する。

二〇一三年、高松市峰山公園の「はにわっ子広場」に「小島烏水顕彰碑」が建立された。